

異所萌出犬歯に対する治療法について

○宮崎修一*) 宮崎明日香*) 伊東泰蔵**)

*)みやざき歯科・こども歯科 **)いとう歯科

【目的】

異所萌出とは正常な位置から離れて発育や萌出することをいう。

本症例は上顎中切歯と側切歯歯根間に犬歯が萌出したので開窓術後に、矯正用マイクロインプラント（以下MIAと略）を用いて牽引した結果、隣在歯の歯根吸収を起さず歯列内に誘導することができたので報告する。

【症例】

患児：13歳3ヵ月 男子

初診：平成22年4月16日

主訴：前の歯に別な歯が出てきている

現症・口腔内所見：犬歯は中切歯の根尖部付近に萌出寸前で粘膜は膨隆していた。診断：上顎右側犬歯の埋伏による異所萌出とした。

【結果】

①犬歯を移動する際側切歯歯根との重なり程度をCT撮影し犬歯移動を考慮した。

②治療は乳犬歯の抜歯とともにMIAを植立し牽引を開始した。

③犬歯遠心移動の限界で口蓋側部に移動することで無事誘導が出来た。

【考察】

1) 上顎永久前歯の萌出障害の発現頻度としては中切歯と犬歯が半数以上を占め、その1/3が犬歯の萌出障害であったと報告（2009年田口）

2) 異所萌出の頻度は、上顎第一大臼歯の近心転位が多く、その次に上顎犬歯の順であった。

3) 固定源にMIAを使用したが、年齢的な問題が検討される。インプラント年齢は18歳前後を目標にしているが、今回のMIAは13歳3ヵ月の小児に対して適応外であった。早期の牽引が必要であったので保護者の理解を得て行った。

4) 犬歯の牽引で周囲に骨が存在するのかを確認するためにCT撮影が必要であった。

5) 永久歯萌出の有無について、学校歯科検診でのチェックが重要とされた。

下顎乳前歯部歯肉に乳頭腫が疑われた一例

○近藤 光 麻生裕美 力武美保子 宮原那実

岡 暁子 尾崎正雄

福岡歯科大学 成育小児歯科学分野

【緒言】

口腔軟組織において、線維腫、線維性過形成、線維性エプーリスなどの線維性組織の増殖による良性線維性病変がしばしば認められる。しかし、それらの多くは、真の腫瘍というよりも修復性、反応性の線維組織の過形成であるといわれている。今回、当小児歯科に紹介来院され、乳頭腫が疑われた患児に遭遇したので報告する。

【症例】

〔患者〕3歳6か月 男児

〔主訴〕歯茎にできものがある

〔現病歴〕2歳ごろ〔AB〕間歯間乳頭部の舌側歯肉が膨隆してきたが疼痛を認め

ないので経過観察していた。1か月前から同部唇側歯肉も膨隆してきたため近医

を受診し、精査加療目的で当科紹介となった。

〔家族歴〕特記事項なし

〔全身的既往歴〕特記事項なし

〔現症〕身長：96cm、体重：15.7kg、Kaup指数：17で標準

〔口腔内所見〕Hellman Dental age:II A

〔AB〕歯間乳頭部歯肉の唇舌側に連続するそれぞれ直径2mm程度のドーム状の腫脹を認める。その表面は弾性軟、カリフラワー状を呈している。〔AB〕に動揺は認めない。

〔デンタルエックス線所見〕〔AB〕の歯根吸収は認めない。

〔臨床診断〕〔AB〕部乳頭腫の疑い

〔治療経過〕初診時、外来にて笑気吸入鎮静下、局所麻酔下にて歯肉周囲を一塊にして切除した。術後2週間および術後5か月時、創面および経過良好。再発は認めない。

〔病理組織学的所見〕

組織学的に過角化、上皮脚の延長を伴う上皮の過形成と上皮下におけるやや細胞密度の高い線維組織の増生がみられる。一部では、上皮下にリンパ球、形質細胞の浸潤がみられる。

〔病理組織学的診断〕：fibro-epithelial polyp of the gingiva（上皮線維性ポリープ）

【考察】

鑑別診断に非歯原性良性腫瘍の線維腫、乳頭腫があるが、本症例では細胞密度が線維腫の診断に至るほど高くなく、過形成ほど低くないという中間の様相を呈していることから臨床的に上皮線維性ポリープと診断した。再発の可能性を考慮して、今後定期健診を通して、注意深く経過観察を行う予定である。